

## 9月5日 年間第23主日

知 9:13~18    フィレ 9b~17    ルカ 14:25~33

### 1. ルカ

キリストの弟子となるということは、それにふさわしい犠牲を伴うものであることを教えるために、ルカ福音書はいくつかの伝承の断片をここに集めました。神の国の宴会は、イエスの死を経てその向こうに実現するものだからです。十字架への道を進むイエス(ルカ 13:33)についてくる群衆に向かって語られた主の言葉として理解することを意図して、ルカはこの物語りを構成したのだと考えられます。

v.26はルカ 18:29 から、v.27はルカ 9:23 から、そして v.33はルカ 18:22 からここに再録されて、それに次の言葉が加えられました。

v.28 「まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。」

v.31 「まず腰をすえて考えてみないだろうか。」

まず誤解を避けるために明確にしておかなければならないことは、“自分の命を憎みさえすれば”、“自分の十字架を背負いさえすれば”、あるいは“自分の持ち物を一切捨てさえすれば” 救いが得られると言っているのではないということです。旧約以来貫かれて来た神中心の宗教が、ここで再び主張されているのです。

現代のキリスト信者の宗教観は、一般に著しく主観主義的な傾向に傾いており、人間中心の現世的要求を満足させてくれる手段ないし対象となっています。キリスト教は個人の内面的な宗教心に満足を与えてくれるもの、社会や世界の平和と繁栄に貢献するものでなければならぬと、多くの人が考えています。“神は人のためにあるのであって、人が神のために造られたのではない” というような、聖書の主張とは全く正反対の浅薄な宗教観が人々の心を支配しており、終末的な希望や私たちを天の聖所に入らせる(ヘブ 10:19)キリストの尊い血(1ペト 1:19)への信仰とは無縁になっています。

あなたは救われていますか？ あなたは確実に神の国に入れるでしょうか？ まず腰をすえて考えることが必要なのだという主の語りかけを、私たちは今朝聞かされているのです。現代のキリスト者である私たちは、もう一度ペトロと共に「わたしは罪深い者なのです」(ルカ 5:8) という出発点に立ち帰らなければなりません。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」というどん底に突き落とされた者だけが、また「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と告白出来るのです(ロマ 7:24-25)。

### 2. フィレ

コロサイの富める信徒フィレモンの奴隷オネシモが逃亡してローマに去り、そこでパウロによって信仰に入り、軟禁されているパウロに仕えるようになりました。パウロはこの逃亡奴隷であるオネシモを主人に無

断で使用するのが心苦しく思っていました、今ティキコがローマからアジアに帰ることになったので、その機会にオネシモを主人フィレモンの許に送り返し、今は兄弟となったオネシモのために事情を釈明して執り成すことを考えて、この手紙を書きました(コロ4:7-9 参照)。

執り成すとはどういうことであるかを、使徒パウロはこの短い手紙で明らかにしています。彼はフィレモンに対して権威をもって命ずるのではなくて、自らの犠牲の上に立って執り成しています。それが「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです」(ロマ8:34)というキリストの執り成しを体験した者のやり方でした。

vv.18-19 「彼があなたに何か損害を与えたり、負債を負ったりしていたら、それはわたしの借りにしておいてください。わたしパウロが自筆で書いています。わたしが自分で支払いましょう。」

### 3. 知

v.17 「あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、それが御旨を知ることができたでしょうか。」

神は十字架の福音によって、世の知恵を愚かなものにされました。世は自分の知恵で神の秘められた計画を知ることが出来ませんでした(1コリ1:20-21)。私たちは以前は自分の過ちと罪のために死んでいた、…… 生まれながら神の怒りを受けるべき者でした(エフェ2:1-3)。わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました(エフェ1:7)。神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです(1コリ1:30)。では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました(ロマ3:27)。

このように私たちが徹底的に砕かれることを、今朝の福音書の主のことばは呼びかけています。21世紀を歩み始めた私たちキリスト者に、主は「まず腰をすえて考えてみる」ことを求めておられるのです。

ハレルヤ、アーメン。

## 9月12日 年間第24主日

出 32:7～14 | テモ 1:12～17 | ルカ 15:1～32

### 1. ルカ

見つけた羊、見つけた銀貨、帰って来た放蕩息子の三つの譬え話が、イスラエルの指導者たちへの反論という形で語られています。彼らは福音書では「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人(異邦人)を見下している人々」(ルカ 18:9)として描かれました。かつて彼らのものであった「神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束」(ロマ 9:4)が、今やイエス・キリストを信じる信仰によって異邦人に与えられるに至ったという初代教会の理解を、私たちはそこに見ることが出来ます。

かつて異邦人は見失われた羊、失われた銀貨、放蕩によって財産を使い果たした息子であったのに、キリストはこれを見つけ出し、迎え入れてくださったという感謝の信仰が、これらの譬によって表現されています。福音書は明らかに見出され迎え入れられた罪人の悔い改めを強調して、これを「悔い改める必要のない」(v.7)「言いつけに背いたことは一度もない」(v.29)と考えたユダヤ人と対比しました。しかも羊や銀貨は悔い改めることは出来ません。そのように罪人が悔い改めるのはキリストからの賜物であって、見つけ出してくださったことへのキリスト者の感謝の応答なのです。

v.32 「おまえのあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」

教会は神の国の相続人でありますから、やがて天の宴会で食事をするという比喻(ルカ 13:29、14:15)が用いられました。そのようにこの譬え話で描かれている祝宴も、やがて到来する天のエルサレムを指していることは確かです。地上の教会の典礼は、この天上の祝宴を前もって味わい、これに参加するものなのです(典礼憲章 8)。

### 2. 出

旧約聖書はイスラエルの民を通して進められて来た“神の救いの歴史”を語っています。私たち教会はキリストの贖いによって「神の(新しい)イスラエル」(ガラ 6:16)となり、旧きイスラエルに約束されていたものを彼らと「一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束に与る者」(エフェ 3:6)となりました。ですから教会は旧約聖書を、自らの救いの歴史の書物として読むのです。

イスラエルは自らの歴史を、繰り返し道からそれる民の罪への神の怒り(裁き)と、それをなだめるモーセの執り成しという形で、振り返ったことでしょう。教会は正にそれこそがキリストがそこから私たちを見つけ出して救ってくださった罪と死の世界であったと、そう理解しました。「あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。」(1ペト 2:25)「キリスト・イエスによって命をもたらず霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さの

ために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。」(ロマ8:2-3)

### 3. I テモ

v.15 「“キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた”という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。」

恐らく初代教会の信者たちの間によく知られた賛美歌の一節か、あるいは典礼文からの引用と思われるこのような定型句が、ここでパウロの名によって再確認されています。パウロが自らを手本として示したキリストによる信仰は、主の恵みによって永遠の命を得させるものでありました。キリスト者はこの地上の人生で信仰に生きるだけではなくて、神の国に復活させていただく信仰をも与えられていることの証人として、使徒パウロは語っているのです。

もう失われていない、もう放蕩息子ではなくなった、だから今は悔い改める必要のない 99 人の正しい人(ルカ 15:7)の側に自分は含まれているような、そんな思い上がりと不信仰は、キリストの救いが永遠の命を得させるものであることを忘れるときに私たちに訪れます。私たちは今おられ、かつておられ、やがて来られる天上のキリストに、今朝聖書を通して語りかけられているのです。

v.17 「永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。」

## 9月19日 年間第25主日

アモ 8:4~7 | テモ 2:1~8 | ルカ 16:1~13

### 1. ルカ

福音書におけるイエスの言葉は、人々が神の国の到来に備えることを最大の関心事として語られていることに注目しましょう。主の死と復活が父なる神の御計画であったように、終末の裁きと神の国の到来は神の救済史の目標であり完成だからです。キリスト者は「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」(v.9) ために、この世の子らの賢さに見習うほどの熱心さを持つべきだと、この譬え話は今朝私たちに語りかけています。

光の子らも、実生活においては必ず賢くなるべきだと教えているわけではありません。仕事を解雇されないうえに、上司に対して媚びへつらう方法もあるでしょう。しかし終末の裁きを越えて神の国を受け継ぐには、人は目を神に向けなければならないのです。「この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒りの日に現れるでしょう。神はおのおのの行いに従ってお報いになります。」(ロマ 2:5-6) 「そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」(使 10:42-43)

### 2. アモ

今朝の日課となっているテキストを、前後関係から切り離さずに、アモス書全体の中で読む必要があります。アモスはこの部分で、商人の不正という当時の社会の道徳的墮落を責めています。しかし彼の預言者としての使命は、選民イスラエルへの神の審判を語り、これに悔い改めを呼びかけることでした。「地上の全部族の中からわたしが選んだのはお前たちだけだ。それゆえ、わたしはお前たちをすべての罪のゆえに罰する。」(アモ 3:2) 当時の北イスラエルは、対外的平和の恩恵による社会的経済的繁栄を享受し、宗教と祭儀は国家の隆盛を保証するものと考えられていました。アモスが責めたのは、その北イスラエルの宗教的な罪でした(アモ 5:21 以下)。彼はそれを「主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇き」(アモ 8:11) による危機の時代として理解したのです。神の民は、神のことばを聞くことと到来する神の審判の日に備えることに、目覚めなければならないからです。それなのに商人たちは、「新月祭はいつ終わるのか、……安息日はいつ終わるのか、……」と、宗教的不真面目さの中を安易に歩んでいました。

そしてこのアモスの預言は、全世界の教会の今朝のミサで朗読されて、21世紀のキリスト者である私たちに「生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト」(II テモ 4:1) と「来るべき怒りからわたしを救ってくださるイエス」(I テサ 1:10) に目を向けることを呼びかけています。永く「主のことばを聞くことのできぬ飢えと渇き」の中にあつた現代の教会は、「喜んで聖書に親しむ」ことによって再び生きることになるからです(神の啓示に関する教義憲章 25)。

### 3.1 テモ

教会が主日のミサの中で共同祈願をささげるのは、単に教会が迫害から安全であるようにという実際的必要のためだけではなくて、さらに「神は、すべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられる」(v.4) という理由によって、初期の時代から続けられて来た習慣です。「神は唯一であり」(v.5) という教義は元来ユダヤ教のものであって、ユダヤ人たちが日毎に唱える“シェマー”の冒頭で繰り返される定型句でありました(申 6:4-9)。しかし使徒パウロは「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。実に、神は唯一だからです」(ロマ 3:29-30) と教えました。

vv.5-6 「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。」

神の救済史の目標であり完成である終末の裁きと神の国の到来に備えることは、キリスト者自身のためだけではなくて全世界のすべての人のために、教会が今こそ目覚めなければならない最大の課題なのです。21世紀の教会にとって、いよいよ「時が迫っているから」(黙 1:3)、「救いは近づいているから」(ロマ 13:11) です。

ハレルヤ、アーメン。

## 9月26日 年間第26主日

アモ 6:1～7 | テモ 6:11～16 | ルカ 16:19～31

### 1. ルカ

恐らくイエス以前から人々の間に流布していたこの通俗的な譬え話を、主は御自分の宣教のために利用されたものと思われます。ある金持ちが終末の日の裁きと神の国の到来を信じないで、毎日ぜいたくに遊び暮らしていました。この金持ちが死んで、陰府での苦しみにさいなまれながら、まだ地上で生活している自分の兄弟たちに警告の合図(しるし)を送ることを願いましたが、それは叶えられませんでした。

v.29 「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。」

v.31 「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。」

主イエスが聴衆に要求したのは、御自身の宣教といやしの行為に人々が神の国の“しるし”を認めることとでありました。「どうして今の時を見分けることを知らないのか」(ルカ 12:56)。イエス自身が神の国の“しるし”であることを理解しない者は、やがて陰府で嘆くことになるであろう。しかし神はさらに特別な“しるし”を与えられはしない、ということです。

この物語りが、図書館に収蔵された古文書の中に眠っているのではなくて、実に21世紀初頭のカトリック教会の今朝のミサで、会衆に向かって朗読され聞かれているということを、私たちは真剣に考える必要があります。なぜならその朗読を通して語っておられるのは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる」(黙 1:4) 天上のキリスト御自身だからです。

### 2. アモ

預言者アモスは北王国の首都サマリアにおける上流階級の贅沢な暮らしを責めました。「お前たちは象牙の寝台に横たわり、長椅子に寝そべり……」(v.4)。近代のサマリア発掘によっても、おびただしい象牙細工の破片が出土しており、それらは家具や調度品の象眼に使われたものと考えられています。すでに預言者アモスの活動よりも70年ほど前に、イスラエルの王アハブがサマリアに象牙の家を建てたことが記録されています(王上 22:39)。なぜ、アモスは繁栄するサマリアの上流階級に神の審判を預言したのでしょうか。その理由は明確でした。

v.6 「しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない。」

ヨセフはマナセとエフライムの父で(創 48)、ここでは北王国のことを指してそう呼んでいます。神の民は、来るべき神の審判の対象以外の何ものでもないというのが、預言者アモスに委ねられた神のことばでありました。神の救済史への無知と無関心を非難し、避けることの出来ない神の審判の時に備えることこそがイスラエルの最大の課題であるという警告の、彼は“しるし”でありました。

今朝のミサの朗読を通して、天上のキリストはこの預言者アモスの言葉をも用いて、現代の私たちキリスト者に語っておられます。

### 3.1 テモ

この手紙はテモテ個人に宛てた形をとっていますが、実際には2世紀初頭に使徒パウロの名を用いて書かれたものであると考えられます。すでに古カトリック教会の形成が始まっており、偉大な使徒パウロの教えは確固たる権威をもって大切にされていました。その時代に、かつて弟子のテモテに宛てて書かれた勧めの言葉の断片が、当時の教会の信徒および指導者への教えとして再解釈されて行った様子を私たちは見ることが出来ます。恐らくそのために、この部分で勧めの言葉は“神の人よ”という呼びかけに置き換えられました。それは旧約聖書以来の用語であって(申 33:1、サム上 2:27 他)、すべての真実なキリスト者たち、特に奉仕者たちを意識して用いられたのでしょう。

使徒パウロ以来、競技をすることがキリスト者の生き方の譬に好んで用いられるようになりました(1コリ 9:24-27、フィリ 3:13-14)。オリンピックで金メダルを獲ることを目標にするように、「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい」(v.12)。この人生の競技は、「立派に信仰を表明した」(v.12) 洗礼の秘跡から始まりました。「この掟を守りなさい」(v.14) とは、何か特別な戒律のことであるよりも、むしろ使徒たちが伝えた福音に生きる忠実さと理解するのが正しいでしょう。その福音のいわば基調が、「わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで」(v.14) なのです。

v.15-16 の頌栄は、使徒パウロよりも黙示録の中の賛歌に似ており、原始教会のミサで歌われていたものと思われます。「王の王、主の主」(v.15) は、黙示録 17:14,19:16 にもあって、特に私たちにとってはヘンデルのメサイアの中で歌われるあの感激的な合唱によって親しみ深いものになっています。勝利者キリスト(Christus Victor)は、来るべき神の国の王なのです。今朝、私たちは共に神のことばを聞いているのです。

ハレルヤ、アーメン。